

燃ゆる感動 かごしま国体 視察報告

報告者：湯山 隼人（静岡県立三島南高等学校）

1. 視察試合

東京都 1-1 鹿児島県（PK 方式 4-2 で東京都の勝利）
福岡県 2-1 新潟県
長野県 0-3 愛知県
佐賀県 4-0 福島県
大阪府 4-3 静岡県

2. 視察を通じて感じたこと

（1）オフェンスタレントの重要性

攻撃局面において違いを生むことができる選手は極めて重要であると感じた。アタッキングサードにおいてしっかりとボールを保持できる選手や決定的な役割を担うことができる選手の価値は普遍的であった。またボール保持や攻撃の完結は守備陣の疲弊を緩和するという部分でもチーム全体に好影響を与えていた。

（2）「冷静な選手」に求められるプラスアルファ

試合中に「冷静さ」を武器にプレーしている選手は多く見られた。確実な基礎技術と広い視野でプレーできている選手であるが、そのような選手にこそプラスアルファの武器を求めなくてはいけないと感じた。カテゴリーが上がり、試合の強度やスピードが上がるにつれて失われていく冷静さに立ち返るための武器（ブレイスキックやボールを奪い切る守備など）をしっかりと身につけていることが上記のような選手のさらなるステップアップにつながるのではないかと感じた。

（3）原理・原則の追求

視察試合の中にはチームとしてビルドアップに重きを置き、最終ラインから丁寧にボールを運ぼうとするチームもあった。しかし中盤での流麗なパスワークと裏腹にバイタルエリアでの人数不足や単調さが垣間見える部分があったことも事実である。

ゴールを奪うためのビルドアップであることを念頭に置き、得点からの逆算がチームとしてされているのかが特に重要であると感じた。

（4）フィジカル・スピード・運動量

愛知県はキックオフからハイプレスと積極的な飛び出しなどで終始試合の主導権を握ったが、特筆すべきは地上戦をほぼ制圧するフィジカルコンタクトの強さと必ずボールホルダーを追い越していく走力であった。現代サッカーにおいてスピードや運動量を含むフィジカル面が高いことはスタンダードなのであり、そのようなベースを持つ選手たちがサッカーの技術や考え方を高めていくことが求められると痛感した。

3. 他都府県と静岡県の比較

（1）個人の守備能力

様々なチーム戦術がある中で、最終的な争点であるボールを奪い切ることができるかという点において大きな違いを感じた。視察試合の中には守備を D F ライン 4 枚で成立させているチームもあった。個人でボールを奪い切る力については大きな差があったと言わざるをえない。

（２）ゲームの流れを読む力を持つ選手

静岡県は開始３分で先制することに成功したが、５分に同点に追いつかれている。得点後にその後の試合展開を優位に過ごすために、ピッチ内に明確なアクションやコーチング等でコントロールできる選手が必要であったと感じた。

リードを奪った際や流れが悪い時間帯にどのような過ごし方をするのかを選手が理解していることも重要である。

（３）基本技術

初戦の難しさもあったと思うが、基本的なパスやトラップのミスが散見された。プレスを受けた状態やスピードアップの場面では特に目立ったように感じる。スピードやハイプレスの中でも際立つ「状況判断」や「止めて蹴る」は静岡県の武器でもあるので、より重要視しなくてはならないと感じた。

４．国体について感じたこと

（１）早生まれ選手の重要性

各チームにリーダーシップを取り、チームを引き締める役割を担う早生まれの選手がいた。高校年代で１年間戦った経験はこの大会において大きくプラスになっていた。佐賀県はサガン鳥栖U 18を中心としたチームであったが、D Fラインには佐賀東の早生まれ選手が３人並び、チームに安定感をもたらしていた。この大会における早生まれ選手の貢献度は極めて高いと考える。

（２）レギュレーションの難しさ

１回戦から決勝まで５連戦となる国体はコンディション面においてもとても難しいと感じた。名古屋グランパスU 18を中心に編成された愛知県は完成度が高く、攻守にハイパフォーマンスを見せたが、２回戦で敗れている。１回戦の視察後に素晴らしいパフォーマンスと同時に５連戦を戦い抜くことができるイメージはできなかった。５連戦を勝ち抜く上ではコンディションの維持に加えて、チームマネジメントをスタッフ間での役割分担をし、大会期間中にチームとして多くの経験をするのが選手やスタッフにおける財産となるを考える。

５．最後に

このような機会を与えてくださった静岡県サッカー協会の皆様、同行していただいたコーチングスクールマスター武田様、その他今回の視察を支えてくださった全ての皆様に心より感謝いたします。

この学びを糧にさらに指導者として成長し、静岡県のサッカーのさらなる発展に貢献することができるよう努力を続けてまいります。